

荒川 雅生

10年前から取り組んだPBLが
いまデザイン思考として実を結ぶ。



①「PBLを通じて僕自身が理解したことは、固定概念を持つていない学生たちの発想は確実に自分たちのできる範囲を超えているということ。問題はそれを正確に表現して具体化していく道具を持っていないことです。チームでよい発想を見つけてその本質をとらえ、必要な道具を学び、解決していく方法を身に着けて、生涯を通して学び続ける人になってしまいたいと思っています」。
②創造工学部の教室の一部のデザイン案。階段まで吹き抜けのオープンスペースで、壁には作品を紹介する大型ディスプレイも掲げられます。

に甘さがないか、ひとりよがりのアウトプットに満足していないかを検証する物事の本質を見る目となります。

荒川教授は「デザイン思考」「リスクマネジメント」をプラスした、香川大学ならではのPBLを考へています。「創造工学部のPBLは、ものづくりのスタートからゴールへの道筋をつくると同時に、未体験の価値をユーザーにもたらし、その価値を守ることにもなるはずです。例えば自動車メーカーのマツダはデザイン思考のものづくりをすすめ存在感のある会社として知られています。デザイン思考ではプロトタイプが重要な役割を果たすのですが、車のプロトタイプを素早く作れば、誰もがそれをもとに意見が言える。チームで思考にモレはないかを検証すると必ずリスクも減ります」。

荒川教授はいま、来年4月に開設される創造工学部の準備を進めています。「4月からは新たに世界級の現場でものづくりを経験した方を先生として迎えます。各先生方には『自分が受けたいと思うような授業を開講してほしい』と伝えています」。それは荒川先生もわくわくしてしまう内容なのだから。詰め込み型ではなく実践を繰り返し、成功体験を積み重ねることで自発的に学ぶ創造工学部の教育。日本の工学教育を変えるという意気込みを語ってくれました。

時は2000年、ある大学での話です。設計工学の先生が学生にCADを教えていました。しかし学生が作る模型は退屈で簡単なものばかり。思案した先生は教えるのをやめて言いました。「私たちでやってみなさい」。すると学生たちはCADをマスターし、いきいきと課題に取り組み、結果、見たこともないような面白い模型が出来上がってきたのだそうです。「楽しいと思って取り組むいろんなことができる」。当時この実践型教育の実例を学会で聞いた工学部の荒川雅生教授。大学院生の授業でプロジェクトベースストラーニング(PBL)を取り入れたところ、学生たちの反応は上々。さらに深くPBLを学ぶためにスタンフォード大学のME310という授業を観て、シリコンバレーのものづくりに触れました。「シリコンバレーで成功した人とそうでない人の差を考えると、ある一定のルールがあるというのです。それは人々のWANTS、ほしいと思う気持ちが出発点だということ。ユーザーから発想するデザイン思考との出会いでした。技術ありきでのづくりをするという従来のやり方とは真逆のアプローチだったのです」。

PBLでは二つの基礎的なスキルが必要です。ひとつはチームワーキング。チームを組むと人は思いがけない力を發揮できるの

ですが、そのためにはひとりひとりが自分を知り、チームにどう貢献できるのかを理解する必要があります。もうひとつはユーザー

を理解し、WANTSに応えるためのデザイン思考。その基礎となるのがロジカル思考で、大きな問題も小さな問題に分解し、分解

所属／香川大学工学部教授
専門分野／設計工学、信頼性工学、感性工学
電子・情報工学科 感性情報システム工学

大杉 奉代

経済成長も雇用も、地域の核は中小企業。
中小企業の新事業開発戦略を研究する。

所 属 / 香川大学経済学部准教授
専門分野 / 経営システム学科



日本の企業の約99%は中小企業。香川だけでなく多くの地域では、中小企業がその地域の経済のパロメーターとなっています。

中小企業が元気だと経済も発展し、雇用も生まれます。そんな中小企業が、もともとの事業を行なながら他の事業もスタートさせることで「事業の多角化」について研究しているのが、経済学部の大杉奉代准教授です。例えばどんな多角化の実例があるのでしょうか?「建設業が農業や福祉事業に進出したという話を聞いたことはありませんか?近年、公共事業が減って次の成長戦略を考えないといけなくなつた際、自分たちの核となる技術や事業を活かしつつ、新たな分野に他企業とも連携しながら進出する例が増えています。最近よく言われる農商工連携もそのひとつですね」。大杉准教授は多角化を行っている中小企業に出向き、企業家にインタビューしてその戦略を調査しています。「中小企業では事業の意思決定においてトップの力が大きいので、彼らがどのような考へで多角化を行っているのかを調べます。未来を見てリーダーシップを發揮するのは経営者にしかできない仕事。多角化に成功した企業は、経営者が独自の考へや理念を持っているからこそ成しえたのだと言えます」。



① 研究室の壁一面には国内外の経営に関する書物が
ざらりと並び、まるで図書室のよう。研究室で著書『中小
企業経営入門』を手に取る大杉准教授。

② 大杉ゼミの卒業生が書いた論文の一部。面白そうな
タイトルが並びます。学生は、まず本を読んで知的好奇
心を広げ、その中で興味関心のある分野を見つけ、理
論で分析する力を身に着けていきます」と大杉准教授。

も戸惑いの声が上がる事も多いのですが…。
「従業員全体でその変化を受け入れるには、
ミドル層の意識が重要となります。彼らの

意識が変わると、会社全体が変わります。中
小企業では人材は特に重要な経営資源。事
業の多角化の中でミドル人材をどう生かす

かは「ミドル・アップ・ダウン・マネジメント」と
言つて面白いテーマなんですよ」と話します。
そんな大杉准教授のゼミは、学生自らが
興味のあることを見つけ、現状分析や論文
読解を通して深探ししながら、その人独自
の理論的な分析を行うというもの。学内の
他のゼミとも交流を図り、前期の終わりに、
学生一人ひとりが何を学んだかを共同で発
表する場を作っているそうです。「他の学
生が何を研究しているかを見るとは、自分
とは違う視点から学ぶ機会を持つとい
うこと。同じ物事をいくつかの視点で見るのは重
要です。経営者も多角的視点を持つからこ
そ、社会の変化に敏感になり、決断できる方
が多いのですから」と説明します。

研究者としての大杉准教授の視点も同様
にユニーク。インタビュー中も「うまくいって
いる企業は失敗を糧にして次の事業を創造
している」「多角化を行う中小企業にとって
は、事業を成功させることが目的ではない。
自社の理想とする理念に向かう中で新規事
業を行っている」など、ハツとする言葉が飛
び出します。オリジナルかつ多様な視点で中
小企業の戦略を見つめる大杉准教授の研究
には、地域経済の次の、成長戦略のヒントが
あるに違いありません。

橋本 忠行

クライエントとの協働による、
こころの理解と支援を目指して。



所
属／教育学部准教授
人間発達環境課程発達臨床コース
教育学研究科学校臨床心理専攻
臨床心理士
研究テーマ／治療的アセスメントに関する実証的研究
わが国への導入における課題と対応

臨床心理学は、「人間の心理的適応・健康や発達、自己実現を援助するための、心理学の人間理解と心理学的方法を実践的かつ理論的に探究する心理学の一領域」(野島、1995)です。近年、保健医療、教育、福祉、司法、産業など多くの場でその重要性が認識され、来年には初の「公認心理師」国家試験が予定されていることもあり、特に注目度が高まっています。

橋本准教授の専門は、その中でも比較的新しい「協働的／治療的アセスメント」。これはアメリカ・テキサス州オースティンのフィン博士が開発した、こころの理解と支援をつなぐ実践的な方法です。伝統的な心理アセスメントでは、クライエントの問題や資質について直接・観察・検査等を通し査定がなされますが、そこにセラピーの要素を融合し、中でも心理検査結果についての話し合いを重視しています。

「『どうしてこんなに気分が落ち込むんだろ？』『交際が長続きしないのは、私に何か問題があるからなんでしょうか？』『といった個人的な問い合わせ、クライエントは抱えています。そういった問い合わせについて、アセスメントを通して一緒に考えていきます」と橋本准教授。客員研究员として一年間滞在した、オースティンの治療的アセスメントセンターでフィン博士から直接学んだことを、日本人

のパーソナリティや文化、そして臨床実践に適したものに調整するという重責を担うひとりです。



①
②

①大学院生が作った箱庭を見ながら、会話の中に質問を重ねて、気持ちを開きながら橋本准教授。どんな言葉にも肯定の姿勢で、作った人のこころを受け止めるような会話を続きます。
②フィン博士の著書「In Our Clients' Shoes」、自身の著書『アセスメントの心理学』、そして、編集委員も務める日本人間性心理学会の学会誌『人間性心理学研究』。

「抑うつ、不安といった情動、不登校や落ち着きのなさといった行動、そして職場内の対人関係など、表面的には症状や問題の



姿をまとって現れてきます。しかしながらその背後にある本質やテーマは本当に個別的で、それらを深く理解するために幅広い種類のパーソナリティ検査や知能検査を活用します。例えば大きな失敗をした時、私たちはどういうに感じるでしょうか。穴があったら入りたい、誰かのせいにしてみたい、あるいは頼れる人の側にいたい、と思うかもしれません。『恥』は日本人にとって重要な感情ですが、そこからの回復過程もそれぞれなんですか。一人ひとりの違いを大切にし、問い合わせを共に探求します」

現在、事例研究として慢性疼痛、社会的引きこもり、子どもと家族のアセスメント等に取り組んでいます。またリサーチとしては、クライエントからの満足度評価や、質的データを基にしたクライエントと査定者の相互作用の分析を行っています。

新設される医学部臨床心理学科では「心理アセスメント」「人格心理学」「人間心理学」等を担当予定。「どんな人に臨床心理学を学んでほしいですか」の問いには、「他者のこころの痛みを想像することができる、優しさを持つた人」と、すぐに答えが返ってきた。『こころの健康と成長をとどける人になることを、あなたも目指してみませんか？』